

芥川だより

発行日 * 2025年6月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

EXPO 2025 はおもしろい



まったく関心が無かった私だが、娘に誘われて初めて行ったときに受けた印象は、暇つぶしにはもってこいのイベントだと感じた。会場のある夢洲までJRと大阪メトロを乗り継いで安く早く行けることが何よりの理由なのだが、通期パスも意外に安く、会期中に10回程度は行けそうに思い世界旅行をするつもりで買った。

1回目に行ったときには、どうしてもアメリカと中国は見たかったので、2時間ほど並んで見た。並び続ける人たちに感心しながら、足が棒になるほど立ち続けた。アメリカ、中国とも期待に反して中身はもう一つだった。2回目に行ったときに

TECH WORLD (台湾) に入場したときに受けた感じが非常によかった。親しみのある癒しがあふれていた。何故なんだろうと不思議に思いあれこれ考えてみた。

パビリオンの場所は、仲の悪い国は離れている。中国と台湾は仲が悪いが台湾は日本に半導体の工場をつくり今後も日本と仲良くしていきたいからパビリオンを出したのだろう。施工費も60億円とアメリカや中国に比べ倍近い費用をかけているらしい。当然かもしれないが、万博は政治的・経済的な影響を大きく受けている。東ゲートから入ると、三菱未来館・住友館が左手に、右手にNTT・大阪ヘルスケアがあり、大屋根をくぐると正面にアメリカ館・フィリピン、フランス、ベトナムが左右にある。

開催費用は大きくふくらみ当初の3倍くらいになっている。裏話では、突貫工事で会期中に壊れなければいいという話もある。警備員の数も非常に多い。特に目につくのは、スタッフが多い、各部署から派遣されて来ている会社や公務員のように見受けられる。暑い中、慣れない歩行者や入場待ちの人の誘導は大変そうだ。とにかく人人であふれているから、どのパビリオンを見るにしても覚悟して並ばないといけな。飲み物も食べ物もそれなりに高いが、アルコール以外は持ち込み自由だし、弁当を持って遠足気分で行っている。毎回、新たな発見がある。特に人気のあるパビリオンの予約は、非常にむずかしいが、休みを利用して今後も通い続けたい。奥が深い万博だ。

死をめぐるあれやこれ (126)

石川 吾郎

先ごろ齢七十を過ぎて初めて高校の同窓会に参加した。私の郷里は岐阜市なので岐阜市のホテルで開かれたのだが、半世紀以上の時間が経過すると友人の顔と名前が一致するのはほんの二、三人だけになっていた。それでも懐かしい話に花が咲いた。◆会が終わって久しぶりに郷里の街をぶらついた。街中にあった実家は、誰も住むことがなくなったので先年処分してもう跡形もなくなっている。それでも幼い頃の記憶がとめどなく呼び起されてくる。◆岐阜城にいつてみた。金華山という山の頂きにあり子供のころからもう何百回も来たところだ。織田信長の居城として有名だ。ここからの眺めが素晴らしいことは大人になって初めて認識した。岐阜の街と濃尾平野を見渡し、北には御岳から乗鞍岳や北アルプスまで顔をのぞかせる。西には朝に夕に眺めた伊吹山が見え、長良川と木曽川の流れが光っている。◆実はそこから小さく実家のあったあたりが見える、この眺望を写真に収めるためにここに来たのだった。このとき撮った写真は、私のパソコンのデスクトップの背景画像になっている。あと何回この景色を眺めることができるのだろうか・・・。

芥川だより二二号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム126	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 135	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 84	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 91	下村嘉明	5
ボケ老人の雑話 14	明石幸次郎	5
オクラの山たより 105	因了生	6
隠された歴史 80	満田正賢	10
俳句	影山武司	12
編集後記	SK生	12
ふみの道草 84	山椒魚	13

素老人☆よもだ帳 (135)

坂本一光

◆太陽を塊にする芋の知恵、あるいは、方円に従う水にある不屈、あるいは、本当に神がつくったヒトなのか

― 近江の農夫だより (その4)

前回よもだ帳の(15)の項に、近江の農夫が退職後の大学広報に原稿を書いた事を紹介した。「随想―試練と備え」と題して十三年前に近江の農夫が書いた随想を読みながら、今も試練は変わらず、備

えはないことを思った。

試練と備え

近江の農夫

今から六十余年前の幼児の頃、金貨を愛でる王様の話を子守歌代わりに枕元で聴いた。家臣に灯りを持たせた王様は、毎夜金蔵に出掛け、そこに山積み金貨を一枚一枚丁寧に磨き上げるのである。この金貨への思い入れをかねて不思議に思っていた家臣は畏れ多くもと願ひ出て、金貨を集めるのは何故か、何処に使うのか。と訊ねるのである。意表をつかれた王様はしばし言葉を失い、ややあつて「い、いつ、いやつ、ただ集めるだけじゃ」と答えている。この話の寓意を解せないままに、とりあえず金貨のまばゆさだけを想つて眠りに落ちた。しかし後年この王様の姿は様々に形を変えて、現実の出来事と重なり続けた。古くは、朽ちた屋根の修復費用をひそひそ相談する両親の深刻な表情に、また、賑やかな縁日の傍らでひっそり物乞いをする老人に、歴史で学んだ江戸期の百姓一揆やフランス革命に、近時では、巨大なファンドに飲み込まれる脆弱なアジアの経済圏、一層近くでは、リーマンショックで世界経済が揺らぎ、その余波に喘ぎながら国の立て直しを図っているギリシヤやイタリアに重なっている。プロメテウスが天界から持ち込んだ火力を人間が文明の礎の一つにまで制御するには長い時間が掛かったと

聞く。原子力(核反応)の制御と同様に、人類はいまなお金力の制御に未熟なのである。

今から十七年前、人間・環境学研究科に研究室を開いた頃、経済バブルが弾けて住宅金融専門会社の債務が表面化した。農林系住専の債務六千八百余億円に公的資金を投入して、日本国の金融不安を解決するという策がラジオから流れてきた。このとき院生の一人は「私企業」の損失に「公金」を当てることに林を震わせながら異議を唱えていた。このバブル崩壊当時の国会論議が単なる爾縫策のすり合せのみで終わり、世論が求める債務の責任迫及も無かったのに、この事例が昨今のECJ金融不安対策に安易に引き継がれている。誠に心細い。金蔵で眠る王様の金貨ならまだしも、膨大に蓄積された資金が更なる利潤や差益を求めて暴走し、国民や市民の備えを脅かすのである。そんな中、個人、家族、地域、国家、地球社会の備えとは何か、それぞれの基軸を何処に置けばいいのか、深く考えさせられる。

地球活動が烈しくなってきた。気圏、水圏、岩石圏でエネルギーの大きな集積と解放が起こり、偏西風の異常蛇行と超ド級台風が発生、干ばつと洪水、地震と噴火に繋がっている。これまでの安定地球がむしろ異常だったと聞くこともあるが、再安定化には地球科学的時間が掛かる。私は生来、杞の人を超えるくらい

心配性なので、近時の烈しい地球活動に備えて家族と地域の生き残り策を練っているが、緊急時生鮮食料として山芋を栽培する、代替食糧兼発電燃料用化学物質として酒精の長期貯蔵を思案するくらいが関の山、「あなた独りだけ生き延びる積もりですか」と責めてくる家人の攻撃にも耐えかねている。

びわ湖沿岸部での藻草の刈取り作業に、地球科学的時間にして二億年相当の神業が重なることがある。化学元素の地球循環を議論してきた研究者達は、リンの循環を次のようにまとめている。すなわち、降雨によって山地から溶け出たリンは河川や湖沼を経海に入る。外洋に達したリンは、二千年掛けて地球を一周する。この海洋循環を百度繰り返して、したがって二十万年掛かってようやくリンは海底に沈積、そのあと海洋底の動きに乗って移動し、最後に、プレート沈み込みに伴う造山活動で二億年ぶりに山地にもどるのである。この遅い、しかし、休み無い動きでリンが地球を巡るのに対して、人間は肥料として、食糧の成分として、リンを数日から数月という短い時間で陸地の上を自在に動かしたのである。持ち込まれるリン、動かないリン、人間活動の活発な周辺水域で、この無害であるはずのリンが大暴れしたのである。沈静化に向けての藻草の処理は、リンを水から山地に戻すという地球時間の短縮には理想的であつても、まだまだその規模は心

許ない。

疾風に勁草を知る。昨今のカタストロフィックな災厄は現代文明が受ける試練なのだろうか。あるいは、パスカルが説くように、自然の下での人間の弱さの原点をしつかり見つめるきっかけなのだろうか。いずれにせよ、次なる文明の萌芽の兆しをそろそろ何処かで感じ取りたいものである。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学命い」の時事放談(84)

祖蔵 哲

く無謬性の哲学く

例によって、先月5月の気になったニュースの話題から始めよう。8日にはイタリアのローマ教皇庁(バチカン)は、フランシスコ教皇の死去に伴う秘密選挙「コンクラバーベ」で、米国出身のプレボスト枢機卿を第267代教皇に選出した。歴史を遡るとこの制度は西暦440年レオ一世から始まったらしい。当時はローマ帝国の衰退期にありカソリックの権威を強調した教皇を選出したようだ。今、世界が混乱期にあり、その影響か、今回

の教皇はレオ「Ⅳ」世を名乗った。そして米国出身者がローマ教皇に選ばれるのは初めてだ。バチカンは全世界に「Ⅳ」億人以上の信徒を有するキリスト教最大の教派・カトリック教会の本拠地。私も急遽、同時期に公開されていた映画「教皇選挙」を見たが、その徹底した秘密主義がミステリーとして描かれていた。歴史の長いカソリックも現代の時代の流れにあつて様々な問題を抱えている。教会の内部には性的虐待問題があり、教義上の問題には人工中絶やDDEI(多様性、公平性、包括性)との対立がある。そのような状況の中でアメリカ出身の教皇を選出したことは現トランプ政権に対して物が言える人物という見方もある。

そのトランプ米政権は22日、名門私大ハーバード大に対し、外国人留学生の受け入れ資格を剥奪すると通知した。その理由が反ユダヤ主義というのである。

アメリカの各大学ではイスラエルによるガザの破壊対して抗議運動が起こっていた。トランプはその反イスラエルが反ユダヤ主義であると短絡解釈している。これはイスラエルの虐殺行為ジェノサイドを正当化する恣意的な解釈であると思われる。抗議している人々はユダヤ人を非難しているのではなく現イスラエル政権を非難しているのである。しかし、この紛争に関して今のところイスラエル外のユダヤ人達から反対の声が上がらないのが不思議だが、それほどこの「反ユダヤ

主義」に対するトラウマがあるのかもしれない。あのユダヤ人哲学者ハンナ・アーレントがアイヒマン裁判を批判した時にも同胞から裏切者のレッテルを貼られて苦しんだことは有名である。

さて、国内では、前年から米価高騰にあつて令和の米騒動といわれていた状況で先月、「米は売るほどある」といった不適切な発言をした農水相が解任され、新大臣に交代した。現在も米の価格については不安定で、その原因が議論されている。しかし、なぜ今になって米が主要な問題になるのか。日本では米離れが言われて久しい。我々が食べる炭水化物の大半は「米」と「パン」と「麺」であり、これらから多くのカロリーを摂取している。最近の家計調査によると穀類の間年支出金額は「パン」が4割、「米」と「麺」がそれぞれ3割らしい。それほど「米」は主要ではない。ではなぜこのような状況になっているのであろうか。一つの原因は昨今の国際関係の不安定な状況を反映しての「食料安保」という不安感も影響しているのではないか。もう一つはやはり政治的な迷惑の失敗が原因だろう。まず、長く政権を維持している自民党の最大支持基盤は知られているように「農家」である。その政治的組織団体が「農協」だ。これが官僚組織と結びついて「米」政策が推進されていたのである。しかし、この政策は失敗した。これが現在の「米騒動」の原因となっている

が、これは「官僚組織の宿命」であるとも言える。その原因が「行政の無謬主義」である。

「無謬」の説明は後述するが、この「無謬性」はカソリックなどの宗教、トランプ政権にも共通する。今月はこの知っているようで知らない「無謬」を哲学してみよう。

(1) 無謬とは

思考や判断に誤りがないこと。事実として誤りがないことというより、理念として誤りがない又はあるべきではないという意味合いで用いられることが多い。つまり絶対に誤りがないという信念を生む根拠として使うものである。

そもそも無謬、つまり「謬が無い」の「謬」とは何か。「謬」は流れる、交錯するを意味するらしい。同じ、つくり、をもつ漢字に「膠」(にかわ)がある。すると、「膠」は物理的に交じり合って離れないを意味し、「謬」は理論的・認識的に混じって誤る意味することになる。蘊蓄を披露するのはここくらいにして現実の話にもどろう。

(2) 無謬性の原則

最近でもよく使われる低落する一方の日本の原因を著す言葉に「失われた30年」がある。これは1990年代以降の日本の経済成長の停滞を指す。その原因がこの「無謬性の原則」であると言われている。

この原則を持つ行政、官僚組織は自ら作成した政策の失敗を認めず、反省しない。このことによって国の政治は改善の機会を逃し、成長を阻害する可能性を除去できなかった。経済政策の決定過程で、無謬性の原則が強くなると、議論が不足し、失敗のリスクを無視する傾向になる。

安倍政権下における森友学園問題はその典型であろう。国が間違った判断をするわけがないというこの「無謬性の原則」は、現実を嘘にあわせるために現実を書き換えさせた。この原則はどこから生まれるのか、先ほども引用したハンナ・アーレントは「全体主義の起源」という本の中で『「為政者の無謬性」を求める人々の欲求が「無謬の為政者」すなわち独裁者をつくり出し、全体主義をもたらした。』という趣旨の分析をしている。現在のアメリカの状況に通じる鋭い見解である。

(3) 陰謀論と無謬性

そのトランプが好むのが陰謀論である。彼が信奉するのはQアノンである。

それは「世界は小児性愛者の集団によって支配されており、悪魔の儀式として性的虐待や人食い、人身売買に手を染めている」という陰謀論、またはそれらを信じる人々を指す。信奉者はそうした集団を「ディープステート」(影の政府)とみなし、民主党の政治家や多くのインテリ層らが所属していると考えている。

陰謀論には無謬性がある。どのような

ものでもそれが「証拠」として採用できる。

なぜなら、陰謀を否定する証拠を彼らはそれも陰謀勢力の情報操作であるとなすからである。この陰謀論の無謬性は単純化されて二項対立に基づいていることが多い。「腐敗したエリートと純真な我々」「国家を破壊する左派とそれを守る献身的な我々」といった対立構造はポピュリズム政治と親和性が高い。この理論は有名な政治哲学者カール・シュミットの「友敵理論」を思い起こす。それが示すのは「分断」を利用した政治であり、これも全体主義につながると示唆を与えている。

(4) 可謬主義と科学

無謬が絶対に間違わないという原理であるとすると、その対立する言葉に「可謬」がある。可謬主義とは「知識についてのあらゆる主張は、原理的には誤りうる」という哲学上の学説である。

この学説はアメリカ・プラグマティストたちが提唱した。歴史的に無謬主義は宗教などの非科学的な理論が持つ特徴であったが、それを批判するには「懷疑主義」をとる立場しかなかった。懷疑主義はすべてを疑うという極端な立場でデカルトがその代表であるが、かれは「我思う」という疑つてもまだ残る「主観」真理の根拠とした。そのために我々は知識を捨てなければならなかった。しかし、「可謬

主義」は懷疑主義と違って、我々が知識を捨てる必要性を含意しない。我々は我々が知っていることを論理的に確実に正当化する根拠を持つ必要はない。むしろ可謬主義は、「経験的知識は、さらに観察をすることによって修正されうる」ということを理由に、我々が知識とみなしているものはどれも、誤りであることが判明する可能性があるということを承認することである。

科学哲学者のカール・ポパーは、可謬主義に基づいて、科学と擬似科学を区別する基準として「反証可能性」を提唱した。

反証可能とは、その仮説が間違っていることを証明できるような状況があることを指します。例えば、「すべてのカラスは黒い」という仮説は、白いカラスが見つければ反証できるが、「宇宙は青い」という仮説は、どのような状況でも反証できない。彼は科学的な知識は常に進化していくものであり、最終的な真理を追求するのではなく、誤りを排除し、より良い仮説へと修正していくことによって、科学は進歩していくと主張した。つまり「疑える余地がある」からこそ科学であるということだ。

ここに「陰謀論」と「科学」の歴然とした違いがある。それを峻別するのが「無謬」と「可謬」である。

(5) ネガティブ・ケイ・パビリティ

絶対に誤らない「真理」はあるのか。

これは哲学の歴史でも古典的な大問題である。ギリシャに始まった哲学はプラトンによって確立された。彼によると真理は「イデア」にあるとされた。それ以後、西欧はルネサンス、近代科学の登場まで「真理」は「神」にあるとされてきた。しかし、先ほども述べたように現代科学はむしろ「真理は変化」するものとしている。現代哲学の分野でも「真理」の存在についてはいまだに議論が続いている。近代科学の誕生以降「経験」が真理の源であるという説が有力であったが現在では「反基礎づけ主義」から「整合説」など様々に議論が戦わされている。これもこの登場による「仮想現実」の影響であろう。

元来、人間は心理として何か確実な拠り所を求めるものである。たとえそれが不確実であっても真理であると「信じた」という傾向をもつ。その極端が「無謬主義」になる。ではその暴走をいかにして防いだらよいのであろうか。

その一つの回答が「ネガティブ・ケイ・パビリティ」である。人間の脳には、わからないものは知ろうという性質がある。これは過酷な環境で生きるためには必要かもしれないがそれが過剰になると脳は暴走する。「ネガティブ・ケイ・パビリティ」とは、日本語で「消極的能力」「消極的受容力」「否定的能力」と言われている言葉で、19世紀のイギリスの詩人、ジョン・キーツが最初に示した概念である。彼は、

この概念を「事実や理由を早急に求めず、不確かさ、不思議さ、懐疑の中にいられる能力」と説明した。つまり答えの出ない事態に耐える力のことである。

さて、今月も話題がトランプ関連になってしまった。これほど彼の言動が世界的影響を与えるというのは決してその発言がでたらめや思いつきでないことを段々と示して 来ている。根底にあるのはやはり、この「無謬性」への回帰である。

その原因の一つは、戦後の「ポスト・モダン」思想がそれまでの絶対的世界観から相対的な立場に変わり、どんなものにも価値があるとしてきた、ある意味、その確実性のなさの反動でもある。Deiに見られる、多様性、平等性、包括性はそれまでの絶対的権威の下にあった既得権者に対する脅威となった。さらに行き過ぎた相対主義は共同体の解体を促し、現実の繋がりを弱めSNSなどの仮想空間に移行した。そこでは真の共感が生まれにくく、それが原因となっているのかもしれない。

そして、それが、今月述べたように「無謬主義」対「可謬主義」の二項対立化を引き起こす。既成の理念組織体、国連からNGOそして大学まで自分達の考え以外のものを陰謀論的知性集団として決めつけ、自らは「無謬」を正統の根拠として戦う「反知性主義」である。現在問わ

れているのはトランプの政策だけではなく、我々の「知性」の在り方かもしれない。

大峯奥駈道（91）

下村 嘉明

体験型人間学 41

万博に警備員が集中しているのか、現場に来る警備員は、高齢で新人ばかりだ。よくもまあ採用したなあと驚くような人が多い。Hさんもそんな一人だ。細身で背は高く、声はかすれてよく聞き取れない。マスクをしているから、近くへ行かないとわからない。

ほとんど身動きせずに、くの時に腰を折り口を開けて立っている姿は、どう見ても警備員が仕事をしている姿には見えない。あまりのひどさに、注意するがもぐもぐと口を動かしているだけなので、注意することはあきらめる。

どういうわけか、Hさんとは現場で一緒になる。私には、組みたくない相手ではあるが、仕方がない。あるとき、話を聞くことにした。歳は77歳、74まで薬品会社で働いていた。24才ぐらいから薬品会社の経理一筋で定年を迎えたという。最後は、経理部長だったらしい。

（次回に続く）

ボケ老人の雑記（その14）

明石 幸次郎

自分達の周りにいる人のタイプとそれらの人が自分達の生き方にどんな影響を与えるかを表現するのに「バルコニー型の人達」と「ベースメント（地下室）型の人達」と区分して表すことがあります。

まず、バルコニー型の人達とは、彼らは「バルコニー」から自分達を応援して、引き立てて励まし、成長を支援する。自分達を肯定してくれる人達である。きつと出来ると励まし、さらに成果を上げることがを期待して、うまくいけばその成功を称える。

一方、ベースメント型の人達は、自分達に閉塞感を抱かせ、足を引っ張り、自分たちの成長を促そうという気はまるでない。自分達を励ますどころか、自信や自分の力を信じる気持ちを打ち砕き、自分達が本来秘めている能力を発揮するのを邪魔する。要するに、自分達をずつと「地下室」に閉じ込めておきたいと思っている。

我々はこれまでの人生でどちらかのタイプにも遭遇したことがあると思います。が、私のような老人はこの先、どんなタイプの人と新しく出会うかは知れていま

すが、若い人は出会う人達の中で、誰が自分達の成長に貢献し、誰が邪魔をしているかを見極めることが肝心であります。さて、どうして一部の人は自分達を精神的に打ちのめそうとするのだろうか？それは、自分が今より高いレベルになれると思えないから、自分以外の人達も全員自分と同じレベルに引き留めておきたいのだろうと足を引っ張るのです。対照的に、バルコニー型の人達は他人の成功におびえたりしない。彼らは楽観的で思いやりがあります。

今の日本社会には残念ながら「バルコニー型の人達」よりも「ベースメント型の人達」の方が多いのではないかと思います。それは今の時代、閉塞的なこの社会が「ベースメント型の人達」を増やしているのかもしれませんが、人が人を作ると言うか、若者は周りの人達、環境に影響を受けやすいものです。

特に心の健康が若者たちの場合は深刻な懸念を呼んでいます。心を病んでそれから抜け出せない若者が増えています。ベースメント型の人達が周りにいると劣等感や自己不信に繋がって心の健康にひどい悪影響を与えます。これに対して、バルコニー型の人達は自尊心、自己肯定感や意欲を向上させます。心を病んだ若者も周りにバルコニー型の人達と出会えば、少しずつ回復するかも知れません。そして、バルコニー型の人達が周りに居てくれたらありがたいというだけでは

なく、自分達の幸福、健康、精神安定の不可欠な一部であるので、私もバルコニー型の人達に囲まれないし、又、私も周りの人達にとってバルコニー型の人になれるように、ボランティアで頑張りたいものです。バルコニー型の人達が少しでも増えれば、この閉塞した社会が変わり、若者にとっても生きる価値のある社会であると思えるのではないのでしょうか。

オクラの山たより (105)

困り生

一

江戸時代に落語家が嘶の始まりで江戸の名物を「火事に喧嘩、伊勢屋に稲荷に犬の糞」という「まくら」を使うことがよくあったそうです。

江戸時代初期、家康が江戸に入った当初、伊勢の者が大量にやってきて町家を割り当てられて出身地の国の名をとって伊勢屋を屋号としたため伊勢屋が多かったと言われており、史料によれば多い時は日本橋界隈の商家の半分は「伊勢屋」とあります。とはいえ数多い伊勢屋でしたが、落語では「伊勢屋」とくれば店主はケチで強欲な人間と相場が決まってい

ました。古川柳にも「伊勢屋さん もう食えるよと 鯉売り」という句があるくらいです。初ガツオの句も過ぎて値も下がったので、ケチな伊勢屋さんでも「もう食べられますよ」と「鯉売り」が声をかけているのです。

江戸の街に稲荷が増えたのは大岡越前守が赤坂に豊川稲荷を勧請して以来のことです。お狐さんをまつる「お稲荷さん」はまたたく間に武家にも町人にも信仰を広げ、数多くの神社ができました。

「江戸（江戸の街）はすべて稲荷勧請の社夥しく、武家は屋敷ごとに鎮守の社あり。市中には一町に三、五社勧請せざることなし」（『東都歳事記』巻之二）と当時の記録にあり、町家でも、たとえば浅草新鳥越町。この町は大川橋（吾妻橋）から千住大橋へ続く往還沿いに一丁目から四丁目までありましたが、一八二五（文政八）年十月に町役人が奉行所に提出した文書には総家数五百八十七軒のところになんと四十三もの稲荷の社があったと記されています。

そして、「犬の糞」です。もちろん、これは江戸の街に野良犬が多かったことをいったものです。どれほど多かったかを知る一つの資料は徳川綱吉による「生類憐みの令」のとき、幕府がつくった十六万坪もある犬の収容施設に収容された野犬の数は二〇万頭でした。もともと戦国時代が終わった直後の江戸では「武家町方共に下々の給物（たべもの）には犬に増

（まき）りたる物はこれなく（と考へ）：冬むきに成り候へば見あひ次第（見つけ次第）に打ち殺し賞翫（「食べ味わう」という意味）仕るなり」（大徳寺友山『落穂集』巻之十）とあるとおり犬は食用として珍重されたため江戸の街には犬は少なかつたようです。それもあり犬が著しく増え始めたのは戦国の遺風も鳴りを潜めた三代将軍家光の頃であつたとされています。

さて、少し寄り道が過ぎましたが本題の樋口一葉にもどりますと「稲荷、犬の糞」はともかく今とりあげたいのは「伊勢屋」です。

文壇デビューの年、一葉は本郷菊坂町の大通りに住んでいました。本郷台地に切れ込んだ浅い谷筋のもつとも低湿な場所に一葉の住まいがありました。彼女の旧居のすぐ近くに菊坂上通りと菊坂下通りとを結ぶ小さな石段があります。この石段を上がって菊坂上通りを下っていくと一葉一家が生活に苦しくなるたびに通った永瀬善四郎が営んでいた一八六〇年創業の伊勢屋質店があります。営業は廃したものの今もなお明治のころの土蔵と格子窓の店構えが保存されています。旧伊勢屋の遺構は二〇〇三年には国の有形文化財に登録されています。

一葉の日記に初めて伊勢屋の屋号が現れるのは明治二十六年四月三日の「この夜、伊勢屋がもとに走る」です。以後、一葉の日記には伊勢屋の屋号が六回登場

します。ただし、明治二十五年八月二十八日の記事に、山崎正助に借りた十円を月末までに返すために「おのれ国子ある限りの衣類質入れして一時の急をまぬがればやといふ」とあるので、明治二十五年の菊坂町に転居した当初くらいからすでに着物を抱えて伊勢屋に走りこむことが幾度かあったと考えられます。

明治二十六年七月二十五日に一葉一家は菊坂町から下谷龍泉寺に転居しますが、転居後も菊坂上通りの伊勢屋はよく利用したようです。明治二十六年八月六日の日記には「夕刻より着類三つ四つもちて本郷の伊勢屋がもとにゆく、四円五拾銭借り来る」とあります。当時の一円は今の二万円ほどであったといえますから、この時、伊勢屋から九万円前後は借りられたということになります。貧困にあえいでいた一葉一家が高価な着物を持つていたとは思えず、伊勢屋はかなりサービスをしたのではないのでしょうか。なお、伊勢屋は一葉の葬儀に参加し金一円などの香典を出しています。どうやら本郷菊坂上通りの伊勢屋質店の主人は落語で語られていたようなケチな根性の持ち主とは違っていたようです。

二

こうして一葉の一家は伊勢屋質店に何度も質入れの品物を持って駆け込んだり、父親則義の幕臣時代の知人などの

あいだで借金のやり取りをしたりしながらなんとか本郷菊坂町での日々の暮らしを続けていました。

この時期（明治二十五年）に一葉をめぐる主な出来事を借金や質屋通いといった金銭関係は除いて振り返ってみると次の通りです。

二月四日

雪の日に半井桃水を訪ね、新雑誌「武蔵野」創刊号に寄せる原稿を依頼される。

三月二十三日

「武蔵野」第一編発刊され一葉は文壇デビュー作「闇桜」を発表。

四月四日～十八日

「改進黨新聞」に「別れ霜」を連載。

四月十七日

「武蔵野」第二編に「たま櫛」を発表。

五月五日

本郷菊坂町七十からすぐ西隣の本郷菊坂町六十九に転居する。

五月二十二日

野々宮菊子から桃水の不評判を聞いて交際を断ちたくなる。

六月六日

桃水から尾崎紅葉を紹介するといわれ、感謝する。

六月十二日

伊東夏子から桃水との交際について忠告を受ける。

六月十四日

中島歌子から桃水と絶交せよと言われる。歌子から桃水は「一葉を妻にする」と公言していると聞いて一葉は憤激する。

六月十五日

桃水邸を訪れ、歌子の指示通り萩の舎の手伝いを口実に「もう訪ねることはできない」と告げ、紅葉への紹介も断る。

六月十五日

田辺龍子（花圃）から明治二十一年十月に創刊した日本最初の文芸雑誌「都の花」への執筆を勧められる。

六月二十二日

桃水邸を訪れ、しばらく交際を断つことを伝える。この日の日記には「哀れに悲しく涙さへこぼれぬ」と一葉は記している。

七月二十三日

「武蔵野」第三編に「五月雨」を発表。

八月二十二日

以前、一葉との婚約を破棄した渋谷三郎来訪。彼は新潟県三条町区裁判所検事（月給は五十円）であった。

九月一日

人を介して渋谷三郎から求婚されたが、一葉は拒否する。この日の日記に「世の中のだんななる富貴榮誉うれはしく（憂はしく）で「嘆かわしいもの」といふ意味）捨てて小町の末

（年若い小野小町が乞食の狂女になったことを指す）我やりて見たく」と一葉は記した。

十月十八日～二十五日

「甲陽新報」に「経つくえ」を連載する。

十一月十一日

五か月ぶりに桃水宅を訪れる。

十一月二十日

「都の花」九十五号に「うもれ木」を発表。九十六号（十二月四日）、九十七号（十二月十八日）に分載された。

十二月七日

桃水の依頼により彼の「胡砂吹く風」に和歌一首を寄せる。

十二月二十六日

「うもれ木」を読んだ星野天知が一葉に「文学界」創刊号に執筆を依頼。

ざっと見てみると一葉のプライドの高さも少し見えるようですが、一年間に「闇桜」「別れ霜」「たま櫛」「五月雨」「経つくえ」「うもれ木」と作品を休む間もなく発表していったことがよくわかります。

これらの作品を一葉の初期作品群とすればいくつかの共通点が見えてきます。まず物語の内容が「うもれ木」を除いて、いずれも「片恋」または「成就せぬ恋」の話であることです。また、内容に沿ってのことでしょうがヒロインはいず

れも十代後半か二十歳過ぎの若い女性であることです。そして、いずれのヒロインも「片恋」「成就せぬ恋」のため物語は彼女たちの病死、自殺、失踪、有髪の尼になるという形で終わります。このことをもう少し詳しく見てみます。

三

文壇デビュー作「闇桜」では良之助と隣家で育った十六歳の一人娘千代は幼なじみの良之助への恋を意識し、恥ずかしさと恨めしさから良之助と顔を合わすことができなくなり、ついに病床に臥しそのまま息絶えます。青春不在の物語ともいえる作品であり、一葉にとっても重圧であった「家」の問題も扱われています。

「別れ霜」では本家の十六歳の一人娘お高と分家の二十歳の一人息子芳之助とは許嫁であったが、分家が本家を破産に追い込んだことから、その仲を引き裂かれます。将来に夢を抱けない二人は心中を図りますが、お高だけが生き残ります。お高は厳しい監視の下で七年間も空しく生を送りますが、ある夜、乳母の目を盗んで自殺します。

「たま櫛」では元旗本の十九歳の娘青柳いと子は三十五、六歳の家臣松野雪三を頼りに生きてきたが、ある夏の夜、子爵の二男で美男子の竹村緑と出会い相思相愛となるが、いと子はずっと思い続けてきた雪三はいと子の夫は自分だと竹村

縁に言ってしまう。それを聞きたいと子は悩み抜きついに死を決意します。家臣であった雪二が主筋のお嬢さんと結婚したいと公言する点は時代の変化を感じさせます。

「五月雨」は二人の女性が一人の男性杉原三郎を愛しますが、三郎は出家してしまうという話です。二人の女性とは深窓の令嬢優子十九歳とその侍女のお八重十八歳です。優子が恋した三郎はお八重の幼なじみでありずっと恋しく思っていた男性でもあったのです。お八重は優子のため恋を断念しようとはしますが、三郎は二人の前から姿を消します。二人が三郎の別荘に行くとそこには雲水となった三郎の姿がありました。

「経つくえ」では元幕臣の娘香月園が部屋に経机を置いて香を絶やさないのはなぜか、という謎解きが語られます。十六歳の娘香月園は彰義隊に参加して死んだ父親の後、父親の友人の子で医科大学の助手をしていた三十前の松島忠雄に養育されます。忠雄にはあちこちから良縁が来ますが彼はそれに見向きもせず、ひたすら園の世話をしていきます。そんな忠雄を園はうとましく思い嫌っていました。しかし、忠雄が札幌に赴任するになり、別れに当たって園はようやく忠雄への恋心を自覚しますが、忠雄が札幌で病死したと知ると園は有髪の尼となつて経机に香を絶やさぬこととなりました。

以上、「闇桜」から「経つくえ」までの作品の梗概を記しましたが、この五作品では年若い女性の「片恋」・「成就せぬ恋」の物語に呪縛されたかのように同じようなテーマを書き続けています。

以前、見たように未完成で断片的ですが明治二十三年ころに書かれた一葉の「初作」とされる「作品1」と「作品2」はそれぞれ父親の死後母親を守るように暮らす兄妹たちと、病気の父の看病をしながら生活を支えているらしい娘の姿が描かれていました。「作品1」で上野の博覧会の売り子になろうという妹（お八重）の「何でもこれまでといふ制限がある事でも其の決まりより上にのぼりたいのよ。一番上等が二十銭なら二十二、三銭とれる様にしたいの」という言葉や、「作品2」の娘（雪）の「汚れた柔らかな物よりか清い木綿がよござんす。なあにおつかさんお案じなさんな、案じるよりは産むがやすいでそんなに困つてばかりいやしません。七転び八起きですよ」という言葉は家を支えている娘の気概とでもいうようなものを表しています。「闇桜」以下「経つくえ」までの娘たちのような弱弱しさは感じられません。

しかし、文壇デビュー直後の作品には「作品1」「作品2」で見られたリアルな世界で生きる娘たちの姿は消え、物語的な虚構の世界の中で年若い女性の「片恋」・「成就せぬ恋」を一葉はひたすら描いていきます。

四

およそ一年の間ですが虚構の「片恋」・「成就せぬ恋」の物語を書き続ける一葉。これはどうしたことでしょうか。

一葉が小説を書き始めた最大の理由は「衣食の為」であり、自分の心のうちから沸き起こる「これを書く、書かねばならない」という思いから小説を書き出したのではありませんでした。そのゆえに一葉は小説を書くにあたって自己の内にある必然性については無自覚なままであったといえます。この主人公でこうしたストーリーで書く。つまり、ただ面白いというだけの薄っぺらな物語を書くのではなく、自分の今の存在にとつて必然と思える物語を書かねばならないという強い思いにまだまだ至ってはいなかったのではあるまいか、そう思えるのです。

書くという必然性のないままに小説を書く、それは当然のことながら「自分はいま何をしているのだろうか」という困惑に行き当たります。すでに紹介した文章ですが、「森のした草」（明治二十五年）で、小説を書き始めて一年近くにもなつたが自分として納得できるものはない、と書き出して以下次のように書いています。

衣食の為になすといへども雨露しのぐ為の業といへど拙なるものは誰が目にも拙と見ゆらん、……人情浮

薄にて今日喜ばるるもの（も）明日は捨てらるるの世といへども真情に訴え真情をうつさば一葉の戯著といふともなごかは値のあらざるべき。

物語を書くということの内的な必然性と家計のためには大衆受けする小説を書かねばならないという現実とを結びつける手段として一葉は「真情に訴え真情をうつす」という姿勢をとることに求めています。この時期の作品を見る限り彼女はおそらく「真情」というものが誰にとつてのそれか、ということをつかんでいません。

いうまでもなく一葉の文学的な知識が古典の世界に集中していること、また、桃水の「趣向」という教えも無視できませんが、「闇桜」から「経つくえ」までの作品が虚構の物語にとらわれているのは登場人物の真情が語り手（つまり作者です）のそれと容易に同一化してしまうためと考えられます。語り手は小説の中の女性の「真情」によりそい、ついにはそれに巻き込まれてしまっているかのようには読み手には見えます。その結果として語り手は語り手としての自律したポジションを維持することができず作中人物への批評性を失ってしまうのです。そのため作品は登場人物の形象の不鮮明さを生み、ウスッペラな内容の物語となつてしまします。

このことがこの時期の一葉の作品が評価されることがほとんどなく最晩年の「にぎりえ」や「たけくらべ」のように多くの人から研究対象として取り上げられない理由でもあります。

五

半井桃水の指導から離れて数か月後、作家として自律すべく模索する過程で一葉は一八九二（明治二十五）年の十一月二十日に「都の花」九十五号に「うもれ木」を発表します。発表されるやただちに星野天知が雑誌「女学生」第三十号で「一新女流作家」が誕生したと紹介し「筆は着想の凡ならざると共に鋭く、人をして其の婦人の作なるを疑はしむるものあり」と力強さを感じさせる作風を高く評価しました。そして、この記事はこれを書いた星野天知らの「文学界」の同人と親交のきっかけを作り出すことにもなりました。「文学界」（同人に星野天知、平

田禿木、北村透谷、馬場孤蝶、戸川秋骨、島崎藤村、上田敏などがいた）とのつながりができたことは一葉が本格的な作家へと一歩を踏み出したという点で大きな意味がありました。

「うもれ木」は陶画工の入江籟三とその妹のお蝶、そして籟三のかつての相弟子であった篠原辰雄をめぐる話です。

陶画工入江籟三（二十八歳）は妻子もなく不遇な赤貧生活をしていましたが、

最高の名品を完成させることをひたすら夢見ていました。妹のお蝶（十七歳）はそんな兄の生活をハンケチ作りの手内職で支えていました。そこへ籟三の相弟子でかつて師匠の金を持ち逃げした美男子の篠原辰雄がやってきて籟三に海外での博覧会への出品を持ち掛けます。出品できればまたとない名誉と考えた籟三は辰雄に感謝しつつ薩摩金襴陶器の画に打ち込んでいきます。一方、お蝶は辰雄に恋するようになります。しかし、実は辰雄は師匠のところから出奔した後、政治活動に参加しますが、それに挫折して今は詐欺師であり、金持ちから金を出させるための「エサ」にお蝶を使おうとして入江兄妹をだましていたのです。お蝶は恋した辰雄からの依頼に苦悩の末、死を決意して家出をします。だまされたと思つた籟三は妹まで失った今、自らを共に葬り去るつもりで丹精込めた作品を庭石に叩きつけ、空しい笑い声を響かせるのでした。

「うもれ木」の内容の中心は理想的な美を追い求める陶画工の物語であり、幸田露伴の「風流仏」（明治二十二年発表）「五重塔」（明治二十四年発表）の影響を受けたものだと言え、よく論じられてきました。たとえば「女人世界の一葉文学に、露伴的な男性的な気概を憧憬する転機をもたした作品」（長谷川泉）とか「たをやめぶりからますらをぶりへの急変を示した作品」（塩田良平）とかいわ

たりして、それまでとは違う男性的な作品であると位置付けられています。また一葉自身も日記で「幸田ぬしこそ嬉しき人なれ」といつていますからそうした評価はいよいよ堅固なものとなつていきます。

それはそれで正しいと言えますが、年若い女性の「片恋」・「成就せぬ恋」の枠組みの中で書いてきた一葉がこの「うもれ木」でそれまでの呪縛を解き放つて少しづつであれ新たな方向へと歩み出しているのは確かですが、この「うもれ木」を籟三という最高の作品を世に残そうとしている男性の物語であると片づけることにはいささかひつかりがあります。そのもととはお蝶という女性の存在です。

お蝶は「願ひは富貴でなく栄華でなく」「そそぐは一心、兄の上ばかり」という純粋な心を持った十六歳の娘であり、辰雄を知って恋するようになってからも辰雄からの愛の言葉を聞いて「不世不滅の愛を得て、我も君様も完全の世を過ぐさるべき」ことを願うだけで「一心のなかばは辰雄のもの」「我は君の妻、君を置きて我が夫なし」と思いつめ、辰雄から資金の援助者である「有力貴顕」の人がお蝶を望んでいることを知らされると、死を決意するほどに純粋な女性と描かれています。

ただし、「死」を決意して出奔するに際してのお蝶の心の内については

操を破つて操をたてんか（恋する辰雄のために貴顕者に身をささげること）、人知らぬ罪わが心にあり。……あれもつらしこれも憂し、何とせん。……病に死ぬも恋に死ぬも、命は一つよ二たびは行かぬ道、天地にも恥ずる処にあらず神仏にもとがめ給はじ、兄様も許し給へよ、我も悔やむところなし。

という記述があるくらいで苦悩するお蝶の内面が十分に描かれていません。そのため彼女の死の決意も出奔も唐突な出来事であるという印象しか読む者はもてません。これではお蝶は兄と恋人のために犠牲になろうとする没我的な存在でしかないということになります。こういう点があるため「うもれ木」ではお蝶の存在は軽く見られ、最高の名作を作ろうとする執念を持ち続けた男性の陶画工の物語とされてきたのでしよう。

しかし、一葉の研究者によると「うもれ木」の今に伝わる未定稿では、お蝶の内面を描くこの部分が憎しみながら恋しく思う気持ち断ち切れず煩悶した末に「死」を決意するという展開になっているといえます。その部分を紹介します。

あの悪人の奸人の憎き憎き、あの痴れ者忘れがたく捨てがたく恋しきは
何ゆゑ、ゆかしきは何故、もとより
言葉は偽りの我を思ふと言はれしも

方法（方便のこと）、我ゆゑ尽力して給はりしも計略。……我れ死ぬべき時来たれるなり。恋に死ぬべき主はかの人、口惜しかの人、大奸人といへど、大悪人といえど我が恋の度、下がりやはする。

この描かれ方からすればお蝶はかなりの苦しみの末に死へと向かうということになります。当然、物語の中でのお蝶の存在は大きくなつたはずで。しかし、一葉はこうした表現は避けました。

おそらく一葉の狙いは、お蝶の純粋性を強調することによって金や権力や名誉を望んでやまない男性たちをあぶりだして、その虚妄ぶりをあぶりださせる重要な要素とすることにあつたのではないかと筆者は考えます。辰雄は自分の金も上げのためにお蝶を利用する詐欺師であり、籟三は名誉を望んだために辰雄の奸計に引つかつた愚か者です。お蝶が狂奔するという事態を前にして、最後に博覧会に出品するために渾身の力で作り出した花瓶を打ち壊すのは籟三の自己否定といつてもよいでしょう。

ここに男性という存在への一葉の痛烈な批判が隠されていると主張するのはフエミニズム批評の立場に立つ研究者の力説するところです。

それに加えて、それまでと違って露伴調の「男性的」といわれる文体を使うことが男性の存在の虚無性を内側から照ら

し出す方法として有効であることを計算に入れていたかもしれないとも主張しています。筆者はそれもあかな、と思いますが、どうでしょう。

もちろん、男性の存在を相対化してしまふほどの強烈な女性を一葉が表現するにはまだ少し時間がいました。二年後の明治二十七年十二月からの十四ヶ月、多くの傑作が書かれた「奇跡の十四ヶ月」と呼ばれる時を待たねばなりません。その時期になると「にこりえ」（明治二十八年九月発表）お力のような強烈な個性を持った女性像も描かれるようになります。言うまでもないことですが、「奇跡の十四ヶ月」時代の一葉の作品には作者が作中人物と同化してしまふという初期作品に見られたような稚拙さはまったくなくなっています。

一八九二（明治二十五）年。樋口一葉二十歳。本郷菊坂町の下通りの家で借金と伊勢屋質店通いを繰り返す赤貧生活の中で一葉は小説を書き続けていきました。この年の前半には半井桃水のことで萩の舎の中でさまざまな噂に悩まされ萩の舎主宰者中島歌子からも桃水との絶交を勧められ、六月二十二日には桃水と決別します。この年の十一月。雑誌「都の花」に「うもれ木」を発表し、一年近く一葉を縛り付けていた「片恋」の呪縛から彼女は抜け出し始めていました。本郷菊坂町の一年間は苦しい中ではありませんでしたが、一葉にとって次への飛躍の準備段

階の時期であつたのです。

隠された歴史（80）

満田 正賢

前回は、宋潤奎著『古代日本の渡来勢力』という本のご紹介をしました。この本は、弥生期の日本は朝鮮半島諸地域から来た集団が各地で朝鮮半島諸国の分国のような小国を作っていたという視点で古代史を見つめなおしている本です。今回は、この本の積極面と問題点について、私の考察を紹介したいと思います。

まず、この本の積極面を見ていきましょう。この本の著者である宋潤奎氏は日本各地の遺跡、出土品、地名、伝承などから、朝鮮半島の特定地域との関連を丁寧に探っています。そしてその地域に朝鮮半島の特定地域から渡来した小集団が移り住んでいたという視点で、古代日本の全体像を映し出しています。前回ご紹介した糸島伽耶系小国、吉備伽耶（任那）王国、備前新羅王国、出雲の新羅—伽耶系小国、出雲東部の高句麗勢力などの記述は説得力のある記述です。おそらく弥生時代から文化的に進んでいたこれらの

地域が、朝鮮半島からの移住者によって作られていたことは事実だと思われます。これは、日本の古代史を日本内部の出来事として記してきた従来の研究姿勢に警告を与える貴重な視点であると考えます。

そして次に注目したいのは、雄略紀の新羅関連記事についてです。著者は、当初吉備地方には吉備伽耶（任那）王国があり、のちに備前には備前新羅王国が成立し、備後には備後百済王国が成立していたとし、雄略紀の吉備の反乱記事が新羅征伐記事と繋がっているのは、備前新羅王国への侵略記事を記したものであると考察しています。これは、私が「隠された歴史（13）」で述べている、雄略紀の朝鮮半島記事についての考察の結論を、別な解釈で裏付けているものです。私は、この本を読む前に、雄略紀の新羅関連記事について次のような考察をしました。

「吉備上道臣田狭を任那国司に任命したことに始まった一連の事件が吉備征服の事件の舞台を朝鮮半島に置換えたとみられるように、ここ（紀小弓宿禰らが大将に任命され新羅と闘った時の一連の事件）でも国内で起こった事件の舞台を朝鮮半島に置換えた疑いが強いと思われます。」

私は、雄略紀の朝鮮半島記事は吉備侵略記事の舞台を新羅とした最悪の作文だと考えましたが、備前新羅王国という見方を導入すれば、その捏造記事の背景を理解することが出来ると思います。

次に本書の問題点について考えてみます。

第一に、著者は、倭国の中で成熟した倭国文化に関心を払っていないということです。著者は、渡来集団の進出時期は、

①紀元前四〜三世紀に始まった北九州への先進的農耕文化をもつ集団の進出。②紀元前二〜一世紀の北九州一帯への銅剣・銅戈・銅矛文化をもつ集団の進出。

③三世紀末〜四世紀初の日本の古墳時代初期の進出。と捉えています。そして①と②との間には二〜三百年の間が空いているとしています。この二〜三百年の間に北九州一帯ではムラやクニが成立し、倭国独自の文化が発展したのではないのでしょうか。何よりも朝鮮半島の言葉と異なる日本語が話されていたからこそ、三世紀の三国志魏志倭人伝では「倭国」という言葉で少なくとも北九州一帯地域を記述しているのだと思われます。

著者は、「五世紀当時の倭は畿内大和ではなく北九州の倭である」と述べています。又、「倭軍が加羅地方に動員されて、高句麗と戦ったことは碑文（*好太王碑文）にも記されているものの、この倭軍は北九州の百濟・加羅系小国であり、加羅地方には倭の現地駐在基地も存在していたであろう。このような北九州の倭軍が朝鮮半島南部に行った話を大和征服後、六世紀以降の吉備任那に設置された国司などと混同し、さらに潤色されて將軍や日本府が作られたのであらう」とも述べ

ています。私は、倭の五王時代・前期九州王朝については、著者が五世紀当時の実態をほぼ正確に把握していると考えます。

しかし、一方で著者は日本書紀に記された歴史は大和の歴史であり、又日本書紀は年代を繰り上げており、神武東征は六世紀初めであるという立場をとっています。著者は、六世紀以降近畿王朝が成立する前の日本はすべての時期において「朝鮮半島の特定地域の渡来系住民による小国の集まり」と認識しているように思われます。倭が「北九州の百濟・加羅系小国」という状態を少なくとも紀元前一世紀頃には脱して、倭独自の文化をはぐくみ、倭国（九州王朝）としての影響力を日本全体に及ぼしているという視点が全く欠如していると考えます。

第二の問題点は、著者が倭国における中国文化の影響を無視しているという点です。著者は、日本における朝鮮半島諸地域の影響を強調する一方で、中国文化の影響にはいっさい触れていません。

日本文化の中心をなす水田稲作文化についても、北九州の水田遺跡が朝鮮半島のものでそっくり同じであるという事実を示しただけで、朝鮮半島文化の導入の代表例であると説明しています。しかし水田稲作文化は中国長江流域で始まったものであり、それが朝鮮半島に伝わった時期と日本に伝わった時期はそれほど離れてはいません。

*最新の調査では、朝鮮半島の蔚山市オクキョン水田稲作遺跡は紀元前十一世紀日本の唐津市菜畑水田稲作遺跡は紀元前十世紀と推定されています

さらに、各地に伝わる徐福伝説や多くの古墳に副葬された漢鏡の存在を考えると、中国からダイレクトに日本に伝わった文化が間違いなくあったと考えます。

又、著者は『新撰姓氏録』に記された各氏族の出自も朝鮮半島諸地域の影響の根拠として挙げていますが、『新撰姓氏録』に記された各氏族の出自の大半は「漢」です。著者は「漢」の出自とする氏族は実際には朝鮮半島出身氏族であるとあつさり説明していますが、朝鮮半島に中国の文化が移入していること、朝鮮半島に移住してきた中国系渡来人の存在、又『新撰姓氏録』に記された日本における主要な渡来系氏族が中国にルーツを持つと自ら名のついていた事実を無視してよいものでしょうか。著者には、地理的に見ても朝鮮半島自体が歴史的に中国からの多くの文化の流入を受け入れていたであろうことを認識の外に置いているように見られます。

第三に、著者が雄略紀の捏造記事の手法を他の時代にも適用しているという点です。著者は次のように述べています。『書紀』の朝鮮関連記事は、外国との涉外関係ではなく、日本国内で起こった出来事なのである。大和による新羅征伐、任那復興問題、小国間の紛争記事などの

舞台を吉備地方とみなしてこそ、真の『日本建国史』大和政権による国土統一の全貌が明るみになる。」

又、百濟に割譲した任那四県は吉備伽耶国（任那）の中にあつた地域であり、任那復興計画は吉備任那の再建であるとしています。

新羅征伐を備前新羅への侵攻であるとする解釈は、雄略紀の手法としては私も同意できますが、『書紀』の朝鮮関連記事全体に適用することには同意できません。雄略紀について私は、「雄略紀は日本書紀の他の条のように、朝鮮半島の史書に実際に記された未詳な人物を近畿王朝の人物に置換えて話を作り上げるという手法をとらず、国内記事の舞台を朝鮮半島に移し、日本が朝鮮諸国の目上にいたということを露骨にアピールしている点で、日本書紀全体の中でも極めて悪質な作文であると考える。」と考察しました。すなわち雄略紀の朝鮮半島記事と他の条の朝鮮半島記事とは明らかに異なるというのが私の認識です。著者は、倭国（日本）による朝鮮半島侵略の事実を否定せんがために、日本書紀全体の解釈に無理を生じさせているように思えてなりません。

それでは、著者の考察の限界の根本理由は何でしょうか。著者の限界は、「五世紀当時の倭は畿内大和ではなく北九州の倭である」、「倭軍が加羅地方に動員されて、高句麗と戦ったことは碑文にも記されているものの、この倭軍は北九州の

百済・加羅系小国であり、加羅地方には倭の現地駐在基地も存在していたであろう。」という分析をしているにも拘わらず、「北九州の倭」が「倭国」として日本を代表していた、という認識に至っていないことです。すなわち著者が「北九州の倭勢力」という日本の古代史学会における通説の考察と異なる考察を行いながら一方で「大和朝廷一元史観」から逃れられていない、ということ。ここに著者の限界があると思います。

さらに言えば、著者は六世紀以降の九州王朝の存在、後期九州王朝の存在が全く視野に入っていない。五世紀まで中国史書及び三国史記に記された倭が北九州の倭であったとする認識は正しいと思います。しかし、その倭は近畿王朝とは別物であり、日本書紀は近畿王朝の歴史を記したものであるという認識には全面的に同意できません。日本書紀には倭の五王時代の前期九州王朝の歴史が一部使われているのと同時に、六世紀以降も継体を引き継いだ後期九州王朝の歴史が特に欽明紀に特徴的に使われています。これは私が「隠された歴史(22)・(23)・(73)・(76)」などで日本書紀・欽明紀の内容を分析した結果として得られたものです。また乙巳の変以降白村江の敗戦まで、後期九州王朝の歴史が綴られているということ、を、「隠された歴史(41)・(44)・(46)」などで考察しています。結局、「九州王朝」に関する正確な

理解がなければ、通説を批判するあまりこのような極論に陥る危険性があるということではないでしょうか。



俳句

影山 武司

チノパンを白に穿き替へ立夏かな
初夏の光の踊るガラスペン
つやつやと土管の並び街薄暑
登り窯の焚口の闇青葉木菟
赤煉瓦の煙突三基夏つばめ
工房の薨波打ち雲の峰
帆船の舳先南へ雲の峰
「おれ」と呼ぶ子らの生意気水鉄砲
田方野の水に漲る植田かな
畦道の綱渡りめく植田かな

編集後記

SK生

▲最近、知人から教えられてアダモの「雪が降る」の曲の替え歌で「コメがない。あなは古米。仕方ない。私は古古米。味悪くない。値段高くない。文句言わない。ただこれから しばらく古米」と You Tube でタレントの清水ミチコさんが歌っているのを知った。思わず口元が緩むが切ない「雪が降る」のメロディーとともに聞くと米価高騰に苦しむ庶民の恨み節にも聞こえてくる。▲こうなってくると気になるのは間近となった参院選である。国民が主権者として意思表示できる、そして、よい政治を実現しうる大事な機会である。しっかりと候補者の言動を見聞きして一票を投じなければなるまい。しかし、SNS による情報の氾濫が多く弊害を生んでおり、民主主義の危機が叫ばれている。▲いさか古い話になるがアメリカの神学者ラインホルド・ニーバー (1892～1971) がその著書「光の子 闇の子」で聖書にある「光の子」と「闇の子」という言葉を使って民主主義の危機について興味深いことをいつている。「光の子」は常に道徳的な主張を掲げ、利己心を抑制すべきとする理想家であり、一方の「闇の子」は自分の利益しか考えない現実的な冷笑家だ。そして、ニーバーが言うには「光の子」は愚かであり、それは自分自身の内に潜んでいる利己

心に気づいていないからだ。民主主義を求める「光の子」の腹の底には私的な利益の追求を潜ませていることを「闇の子」は見抜き、それを上手に操ってヒトラーは独裁体制を作ったのだともいう。▲今、民主主義を危うくする「闇の子」にどう対峙すべきか。ニーバーは言う。「賢い光の子」になれ、と。政治の場では現実主義も必要で、ときに「闇の子」の知恵も借りねばならない。ただし、正義の名のもとに自己の内にある利己心を暴走させてはならない。それは孤立と独善を生む。それができることが「賢い光の子」の要件だ。それでもというときにはどうするか。神学者のニーバーにはこんな祈りの言葉を残したことも知られている。「神よ、変えられるものについて変える勇気を。変えられないものについては、それを受け入れる冷静さを。そして両者を見分ける知恵を与えたまえ」と。温厚な人柄を感じさせる言葉であるが、その内側に強靱な意志を感じさせる。▲なお、ラインホルド・ニーバーのことは東京女子大学の森本あんり先生の文章から教えていただいた。

